

大手企業と集団就職

——小泉製麻における若年女性労働者の赴任と生活（その2）——

山 口 覚

I はじめに

三島由紀夫の小説『絹と明察』（三島，1987，初出 1964）は，1954 年の近江絹糸人権闘争に着想を得たものであった。この小説の舞台である駒沢紡績は「使うてる者を我子と思い，むこうもわしを親と思うてくれとる」（p.48）というように家父長制的な経営方針を採っていた。若い労働者たちはそうした前近代的な方針に対抗するために労働組合を結成し，労働環境の改善や手紙の検閲の廃止など「人権」をめぐる要求をもって闘争する。経営者である駒沢の生き様を主題とするこの小説では労働者についてはあまり詳細には描かれないものの，「それぞれ出身地のちがう駒沢紡績の工員のあいだでは，駒沢紡績語ともいべき，ほとんど標準語にちかい共通語が生れていた」（p.134）というように，多くの労働者が様々な土地から就職し，互いに標準語のような言葉を用いていたことは理解される。また，駒沢は，労働者の余暇活動を否定的に見ていた。「サークル活動は風紀を紊し，文化的なたのしみは青年を腑抜けにし，……自由を与えたりすることが，自然に反する行いだとよく知っていた」（p.255）。

では，現実の近江絹糸ではどうであったか。同社の人権闘争について記した本田（2019）は，「集団就職」（p.12）してきた若年女性労働者の余暇活動に少し触れている。「女性労働者達は寮と職場の往復だけで，ほとんど外出する時間もなかった。寮生活では，就業後，様々な行事があつて忙しい。その合間

に、料理、裁縫、華道、琴などといった趣味の活動が挟み込まれていた」(p.15)。あるいは「外出する場合の余暇といえば、近隣への遠足やハイキング、海水浴などにかぎられていたようである」(p.180)。本田は1950年代における余暇活動の描写をこの程度に留めた上で、1960年代にはこの状況がいかに変化したであろうかと問うている。

労働争議のような特定の事象に力点を置くと、それ以外の場면을詳述することは当然ながら難しくなる⁽¹⁾。また一般に、高度経済成長期の若年労働者が集団就職と結びつけて語られる場合には、厳しい生活状況や労働環境に焦点が当てられ、集団就職者の多様な経験にはほとんど言及されない。集団就職は定型化されたネガティブなイメージによって語られることが多いため（たとえば成田，2016），そうした語りを見直していく必要がある。つまり集団就職という現象は、制度的側面から人々の経験に至る様々な側面に関して実証的に検証されるべきであり（山口，2016），当時の若年労働者の生活状況や余暇活動についても今少し詳細に解明されて良いはずである⁽²⁾。

付言すれば、高度経済成長期における余暇活動の在り方は、その後の消費社会からすれば質素と見えるものかもしれない。しかし当時の企業、特に大手企業は、福利厚生観点から余暇活動を無視できなかった。すでに1950年代には従業員の保健衛生を考えてスポーツが励行され、当該施設の整備が進められたのである（新，2015）。

本稿では神戸市に拠点を有する製麻大手企業の小泉製麻を対象とする。同社に関しては前稿（山口，2019）でも扱っており、若年女性労働者の求人方法や募集地の展開、遠隔地からの集団赴任の方法、企業内学校の変遷、寮生活の一端などを取り上げ、大手企業と集団就職の関係を考察した。集団就職という言葉にはその当時からネガティブなイメージが付与されていたためか、小泉製麻ではこの言葉がほとんど用いられなかったことも理解された。他方で労働者の経験に関しては、前稿ではその一部しか確認できていない。そこで本稿では1950～70年代における生産工程や寮生活の状況、それらについての意識、さらには余暇活動の在り方を見てみたい。以下の前半では鹿児島県から就職した

2人の姉妹に対する聞き取り調査結果を、後半では1958年から発行されている社内報（山口，2019，p.42）を利用する。

本題に入る前に、この時期の小泉製麻本社工場での生産工程や工場周辺の変化を確認しておきたい。

II 1950～70年頃の小泉製麻における 生産工程と本社工場周辺の変化

(1) 戦後における生産の再開と労働者募集

1890年に都賀浜麻布会社として設立された小泉製麻は日本でもっとも古く、また最大手の製麻企業であった（「小泉製麻百年のあゆみ」編集委員会編，1990）。1936年には当時東洋一の寄宿舎と言われた女子寄宿舎、いわゆる「女寄」が竣工しているように、多くの若年女性労働者が雇用されてきた。この女子寄宿舎は1945年に米軍によって接收され、47年に返還されている。戦後における同社の生産は、翌48年6月にジュート（黄麻）の輸入が再開されることによって開始され⁽³⁾、それにあわせて各地での求人も始まった。「兵庫県をはじめ、鳥取、島根、大分、宮崎、鹿児島、徳島、高知、愛媛の九県のみなさんが、つぎつぎと入社され、同二十三年には一〇〇〇人が、つづいて翌々二十五年、六年にかけて、さらに約一七〇〇人が増員され」⁽⁴⁾、従業員が3300名にまで増加した。兵庫県や大分県などの9県は「縁故地域」と呼ばれ、その後の新規学卒者の募集においても重視された（山口，2019）。

ジュートの輸入再開直後の1948年7月に雇用された鳥取県出身者の回顧によれば、「寄宿では、いい人ばかりの部屋に入って、楽しかったア。ほんとにいい人ばかりで……あの頃の部屋は、よくまとまって、よかったネー、って話し合うんですヨ」⁽⁵⁾。さらに、前稿でも取り上げたが、1951年に入社した大分県出身者は次のように記している⁽⁶⁾。

赴任の時は別府から船で、るり丸といって当時一番大きな船と聞いてい

ました。私達の時は六〇〇名以上の入社があり、四月上旬に山陰・四国勢、四月中旬に九州勢と二回に分かれて赴任して来ました。

寮生も二千人いて、一部屋（20 畳）に十三名が定員でふとんでも重ねてひかねばなりませんでした。ですから、食事や風呂の時はたいへん。一足でも早く、仕事が終わる（ママ）と競争みたいに風呂に走って行きました。少し遅れると先の人が出るのを待たないと湯舟に入れませんでしたから……。

食事は麦ごはんで盛付一杯。物足りなく時にはパンを買って食べました。給料が当時二千五百円位でパン代が十円。物が高い時代でしたので家からクーポン券（今でいう割引券）を送ってもらい、少しでも安く買える様に努力しました。

衣料品は特に高く、ブラウスでも給料全部出さないと買えなくなって、オシャレなんかとてもとても。ですから三年目には無理してミシンを買い、自分達で洋服を作りました。生活にしても仕事にしても精一杯、全員必死で頑張った時代です。（昭和 26 年 4 月入社）

特に山陰・中国勢と九州勢が 4 月中に 2 回に分かれて赴任してきたという話、あるいは食事やミシンに関する話は後述する内容とも関連する。

同社では生産の強化に合わせて毎年多くの新規中卒者を遠隔地から雇用してきた。1952 年にはフランスやイギリスなどによる綿製品の輸入制限のため、紡績業界に対して政府から操業短縮が勧告され、新規学卒者の大幅な雇用調整がおこなわれた（山口，2018）。この年に関しては小泉製麻でも同様の措置が採られており、同社に多数の労働者を送ってきた大分県では次のように言われている。「これまで好条件を備えていた小泉製麻も三十七名の応募者を数次にわたってフルイにかけ結局一名採用予定という厳選ぶり」⁽⁷⁾。しかしこれ以降では求人活動が改めて活発化する。なお、図 1 は 1958 年以降の新規学卒就職者数を示している⁽⁸⁾。

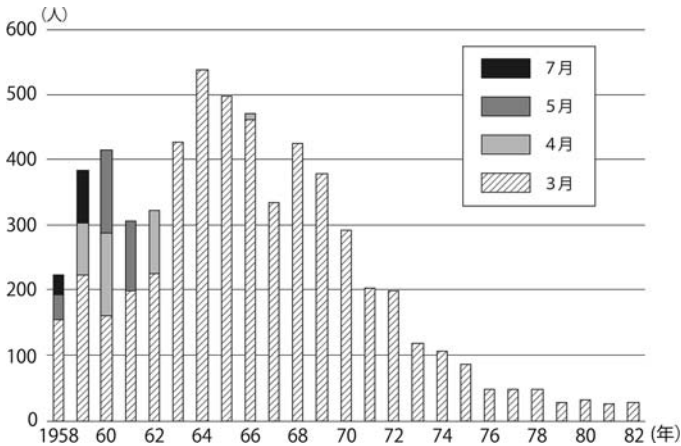


図1 小泉製麻における新規学卒者数と入社月（1958～82年）
資料：社内報各年分。山口（2019）の図4（p.50）を修正。

（2）麻製品の生産工程

次に、同社における麻製品の生産工程を見てみよう（図2）⁽⁹⁾。まずは圧縮して輸入される原料＝ジュートの①開俵がなされる。「開俵機にかけるのは、男の人の仕事」⁽¹⁰⁾であったという。次の②軟線では原料を軟化し、また等級別を選別する「撰麻」がなされた。③粗紡では、選別された原料の長さや方向を一定にした上で繊維を引き伸ばし、最後に粗紡機で軽く撚りをかけて「粗紡糸」を作る。粗紡糸の一部はそのまま製品として売られたが、大半は④精紡に送られてさらに強力に繊維を伸ばされ、撚りを掛けられて「精紡糸」となる。粗紡と精紡をまとめて「紡糸」とも呼ばれる。精紡糸は⑤巻糸で一定の形状に

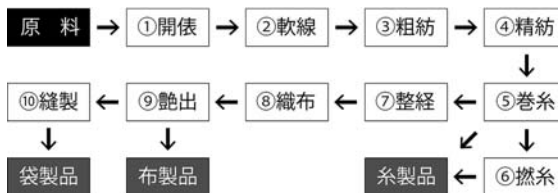


図2 小泉製麻における麻製品の生産工程
資料：小泉製麻の内部資料による。

巻かれ、そのまま「単糸」として製品化されるものと、工程名の通り⑥撚糸にされたり、⑦整経に送られて最終的に布・袋製品にされるものがある。精紡糸は必要に応じて様々な大きさに巻いた総（かせ）糸にすることもある。また⑥撚糸には糸を加工して「糊糸」や「染糸」にする作業も含まれる。⑦整経は立糸・立経とも呼ばれ、布地を作る際の立糸（経糸）を整える作業をおこなう。⑧織布では織機を用いて布地が織られ、それは⑨艶出を経て布製品になるか、⑩縫製を経て袋製品となる。

これら各工程への労働力の配分を 1958 年 3 月に入社した新規学卒者 156 名を例に見てみよう。所属工程別人数は多い順に織布 50 人（32.1%）、巻糸 25 人（16.0%）、精紡 23 人（14.7%）、軟線 17 人（10.9%）、粗紡 8 人（5.1%）、その他 8 工程で計 33 人となっている⁽¹¹⁾。織布工程に配属された人数が全体の 3 分の 1 を占めており、巻糸、精紡がそれに次いでいた。各工程の担当者の意識については後述する。

（3）小泉製麻本社工場周辺の変化

ここで高度経済成長期における本社工場周辺の変化を確認する。図 3 の上図は 1950 年頃の様子を示している。同社の工場敷地は阪神本線の新在家駅の南北に広がっていた。また、この図の範囲内には同社以上の規模を有する工場はなく、すぐ南は海であった。国道 2 号線には阪神電鉄国道線（1927～75 年）が敷設されていた（上野編，2012）。

その後、周囲は大きく変化する。この地区は 1946 年の神戸市復興基本計画要綱に基づく土地整理事業施工区域に含まれ、1959 年頃から換地方式によって事業が進められた。1700 人を収容できたという女子寄宿舎の 3 分の 1 も取り壊された（「小泉製麻百年のあゆみ」編集委員会編，1990，p.50）。後に国道 43 号線となる「50 米道路」の設置が 1958 年に発表されると、「工場・女寄間を横断 阪神電車は運動場を」というように、同社工場にも大きな変容が生じることが社内報で報じられた⁽¹²⁾。1961 年には「第 2 阪神国道建設による当社の敷地提供や、農産物麻袋需要増大のため、新工場用地を探していたところ、

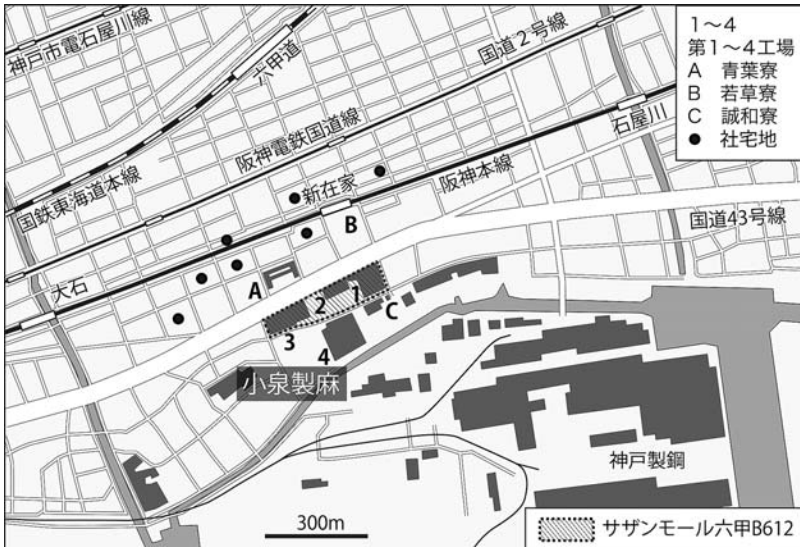
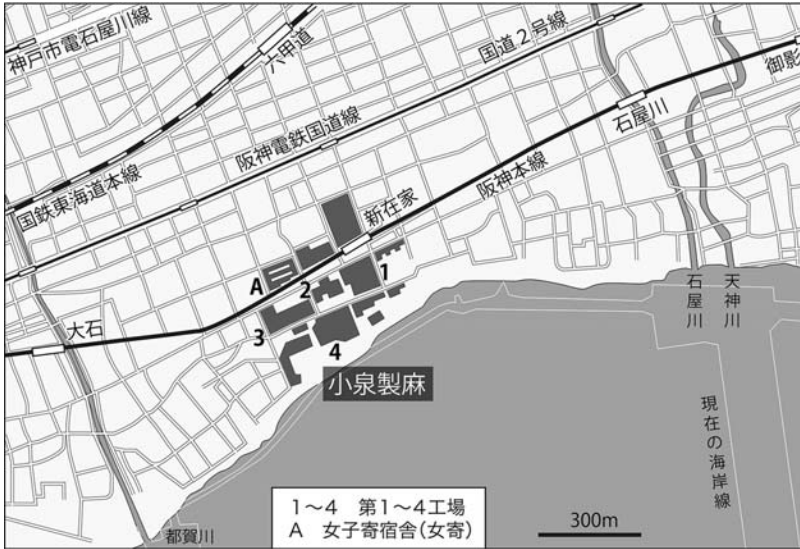


図3 小泉製麻本社工場周辺の変化（上：1950年頃・下：1970年頃）
 出典：2万5000分の1地形図「神戸首部」（1949年・1969年発行、今昔マップ），『いずみ』第157号，1971年4月に掲載の「コイズミのまち」を参照して作成。

このたび滋賀県庁の斡旋で、工場用地買収の話が地元との間にほぼ、まとまった」⁽¹³⁾。1964年には滋賀工場が竣工している。

図3の下図は1970年頃の様子を示している。阪神本線は高架化（1968年）によって直線的な路線となっており、かつて路線があった場所は国道43号線などの道路に変わっている。小泉製麻の第1～4工場は国道43号線の南に、青葉寮（旧女性寄宿舎、A）や若草寮（B）、社宅地は国道の北に位置する。図では示していないが、1970年には国道43号線上に高速道路（現阪神高速神戸線）が開通した（同上、p.198）。また、小泉製麻の地先には広大な埋立地が造成され、神戸製鋼の巨大工場が置かれている。神戸市における戦後の海面埋立事業では都賀川から石屋川までが「第一工区」と呼ばれ、もともと神戸製鋼所が高炉建設用地として埋め立てを始めており、後に神戸市との合同事業となった（田辺監修、2011、p.194）。神戸製鋼の工場が近隣に立地したことで、1967年には、戦後恒例となっていた小泉製麻の盆おどり大会が「初めての試みとして神戸製鋼所、地元地区の皆さんと合同で行なわれ」⁽¹⁴⁾、少なくともその後2年間も同様に実施されている⁽¹⁵⁾。1969年10月には「女子寮生約六〇名が、神戸製鋼のご厚意で民踊大会に招かれました」⁽¹⁶⁾とある。小泉製麻の従業員たちは、ここで取り上げた土地利用の変化や神戸製鋼の工場設置を含め、周辺で生じた様々な変化の中で生活していたのである。なお、小泉製麻のグループ企業が経営するショッピングモールであるサザンモール六甲 B 612 の敷地は、かつての第1～3工場の跡地に相当する。

では、小泉製麻へ就職した人々の姿を見てみよう。まずは鹿児島県出身の（旧姓）田之頭アキ子氏・トキ子氏姉妹からの聞き取り調査結果である⁽¹⁷⁾。

Ⅲ 鹿児島県から小泉製麻へ

（1）1951年就職の田之頭アキ子氏

アキ子氏は1936年に鹿児島市の農家に生まれた。長女であった。同市の河がしら頭 中学校を1951年3月に卒業した。両親から働きに行くように言われた訳

ではなく、実際に就職から退職に至るまで実家への仕送りはしていない。教員から小泉製麻に行くように言われて行っただけであり、周囲からは良い会社だと言われたが、自分では働き始めるまでどのような会社であるか知らなかった。神戸のことも知らなかった。鹿児島には仕事がなかったので地元で働くという考えはなかった。

どのように神戸まで来たのかは良く覚えていない。卒業から数日後の出発だった。見送りを受けながら何名かとともに長い時間を汽車に乗って神戸までやって来た。

仕事では軟線工程（図2）に配属された。大変だった。「女工さん」と呼ばれていた。麻製品を作る第一段階として、大きな木のような植物（ジュート）を機械に入れていき、長い繊維を取る。この工程は単純なものだった。第二段階ではさらに細く割いていく作業となる。その時に白い綿ぼこりが大量に出るので全身が真っ白になる。仕事はいくつかの段階に分かれていて、順番に覚えていった。しかし麻糸を織り上げる紡糸工程に従事したことはなく、材料を柔らかくする作業だけをしていた。白い綿ぼこりが舞うような環境だったが体調を崩すことはなかった。自分の周りでもそうした話は聞いていない。若かったから元気だったのだろうか。

寮は鉄筋コンクリートの立派なものだった。寄宿舍4階の405号室は20畳あり、各自が使える縦長の棚や床の間があった。その部屋に13人いた。基本的な人間関係は寄宿舍の部屋のメンバーを中心としたものだった。鹿児島県出身者はいなかったと思う。特に仲の良い三人組で良く遊び、「三羽ガラス」と呼ばれたが、自分以外は島根県出身者だった。互いに標準語のような言葉を話していたのだろうか。

当初は三交替制が採られていたのではなかったか。真夜中にも働いた気がする。交替制の組に当たっている者がいない時間には13人全員が部屋にいたこともあったが、部屋の中で異なる組の者がいたので、全員が揃わないこともあった。基本的にはこの部屋のメンバーと一緒に行動し、仲良く過ごしていた。喧嘩したことはないし、自分の知っている範囲ではそうした話を聞いたことも

ない。一緒にいるのだから関係が良くなければやっていられない。年長の部長がいた。何年かして自分も年長者になったが、部長に選ばれたことはなかった。1960年に退職するまで405号室で過ごした。部屋のメンバーは年々入れ替わっていく。労働時間は9時間拘束で、うち1時間は休みだった。時間はしっかり守られていた。出勤時には交通安全のために設置された地下道を使っていた。同社で働いた期間の途中から甲班、乙班という二交替制になったかもしれない。

作業着は非常に汚れるので毎日洗濯した。洗濯機が設置された部屋があった。当時でも電気洗濯機や脱水機があったのではなかったか。洗濯物は建物の屋上に物干し竿が並べられており、そこに干していた。

食事は大食堂でとった。麦ご飯であった。調理の人がいて、きちんとおかずも作られていた。故郷では芋ご飯ばかりだったからかもしれないが食事に不満を感じたことはない。仕事の時間や公民学園の時間以外は自由だった。寄宿舎の門限は夜の9時であり、それ以前であればいつでも外出できた。六甲道商店街などに良く行って、そこで何かを食べることもあった。美容院は会社の中にあつたように思う。誰かがパーマにしたら、それを真似てパーマにしていたというようなこともあったかもしれない。

公民学園は希望者のみ、だいたい従業員の半分ぐらいが参加していた。何を習うかも選べた。勉強の科目もあったが、華道（写真1）や茶道、裁縫、踊りなどを習った。寄宿舎の地下にそれぞれの教室があった。自分の服は生地を買ってきて、裁縫の部屋のミシンを使って自分で作っていた。小泉製麻ではそうしたものが良く揃えられていた。今でも裁縫を自らおこなうが、それは小泉製麻でその技術を身につけられたから。1954年の忘年会を写した写真2の背景には「ミシン」と書かれた機材を確認できるが、これは個々人が購入したものだった。公民学園で学んだことはその後の人生でも非常に役立つものだった。公民学園では学芸会で劇を披露することもあったし、クリスマス会も開催された（写真3）。

休みは毎週あり、仲間たちと良く遊びに行った。ケーブルカーを使って六甲



写真 1 公民学園の華道教室

出典：写真 1～6 はすべて大園アキ子氏蔵。



写真 2 忘年会（1954 年）



写真 3 公民学園のクリスマス会



写真 4 運動会（1）



写真 5 運動会（2）



写真 6 小泉の盆おどり

山に行ったり、宝塚に行ったり、六甲にあったダンスホールにも行った。鹿児島県の甕島出身で、川崎製鉄で働いていた夫ともこのダンスホールで知り合った。会社ぐるみで奈良などに出かけることがあった。社長さんは太っ腹だったのではなかろうか。運動会もあった（写真 4・5）。

やはり寂しい時はあった。電話がない時代だったので故郷などへ手紙を良く

書いた。しかし家族に不幸があった時を除けば帰省したことは1度もなかった。お金がかかるということもあったかもしれないが、どのように切符を買うかも分からなかったのも、そもそも帰省するという考えが浮かばなかった。お盆に帰省しなかったのも「小泉の盆おどり」(写真6)を楽しんだ。踊ることが好きだった。忘年会の時に撮影した写真2には「1954年12月19日」と記されている。帰省する人もいたので、そうした人が帰省する前に忘年会をおこなっていた。食事は会社が用意してくれた。

同郷者との関係は特になかった。県人会のようなものに参加したこともない。同じ学校の出身者がいたかどうかとも分からないし、後輩がやって来たということも分からない。

賃金は当初2500円ぐらいで、年々上がっていった。労働組合があったので賃上げ闘争のような運動もなされていたが、そうした運動は組合の一部の人々を中心になって担われていたので、運動に参加したことはなかった。

帰郷や結婚という理由で退職する人はしばしばあった。小泉製麻で働くのが嫌になって退職したという人は身近にはいなかった。誰かが退職する時にはいつも送別会をおこなっていた。

小泉製麻、特に公民学園で学んだことはその後の人生にも役に立った。仕事は大変だったが、今から思えば本当に良い会社だった。良い思い出しかない、楽しかった。1958年に結婚し、1960年に退職した。夫の転勤によって千葉県に移住し、現在までそこで暮らしている。

(2) 1960年就職の田之頭トキ子氏

トキ子氏は1944年生まれであり、1960年3月に河頭中学校を卒業した。高校に進学してもう少し勉強したいと思っていたし、末っ子ということで「この子だけは高校に行かせてやりたい」とも言われていた。しかし中学3年生であった1959年11月に父親が逝去したこともあって就職せざるを得なかった。鹿児島県では就職先がなかった。姉のアキ子氏が働いており、中学校の教員の勧めもあったので小泉製麻に就職することにした。同社についても神戸市

についても何も知らなかった。今と違って給料などを先に調べるようなことはなかった。

蒸気機関車の就職列車で出発した。その列車には小泉製麻に就職する同じ河頭中学校出身の5名だけでなく、他社に就職する多くの就職者も乗っていた。

当時の社内報によれば、トキ子氏は4月13日に入社して「乙班四紡糸」に配属されている⁽¹⁸⁾。同じ中学校出身の残りの4名については、甲班一卷糸1名、甲班四紡糸2名、乙班一卷糸1名であった。つまりトキ子氏と同じ班・工程の者はいなかった。そのためであろうか、一緒に赴任した同級生とは入社後はあまり親しく付き合っておらず、もっぱら寮部屋の仲間と親しくしていた。

紡糸工程（粗紡・精紡）の仕事は覚えることが多く、大変だった。綿ほこりが舞うような環境だった。毎日冷たい地下道を通して工場に通っていた。二交代制だった。給料のかかなりの部分は実家に仕送りしていた。

寮では10数人が一部屋で生活しており、各自1畳ぐらいの場所に布団を敷いていた。公民学園には行っていない。盆には帰省しなかったものの「小泉の盆おどり」にも参加しなかった。

遊んでいた記憶はあまりない。同室の仲間たちと話をして過ごしていた。他県の人が相手だったので、方言ではなく、訛りのある標準語を使って話していた記憶がある。六甲にあった映画館にはしばしば行っていた。ケーブルカーで六甲山に上ったこともある。会社では演芸会が催され、歌手の水原弘が来たことを覚えている。

姉のアキ子氏はすでに結婚しており、寄宿舎を出て阪神大石駅（図1）の近くにあった文化住宅に住んでいた。休みの時にはたまに遊びに行くこともあったが、主には同室の友達と街へ遊びに行っていた。互いにそれぞれの生活を楽しんでいて。

夏頃からもっと勉強したいとの気持ちが強まり、経理学校に行くことを考えた。1年間で小泉製麻を退職し、失業手当を利用して鹿児島市の経理学校で2年間勉強した。学校を修了してから関西の方で再就職した。こちらで知り合っ

た男性と結婚し、今でも大阪府寝屋川市に住んでいる。

(3) 田之頭姉妹の経験について

鹿児島県出身のこの姉妹は年齢が9歳離れており、小泉製麻での経験もまた大きく異なっている。アキ子氏の就職は家族から求められたのではなく、中学校の教員の勧めによるものだった。トキ子氏については高校進学する意志があったものの父親の逝去によって就職せねばなくなり、姉がいたことと教員の勧めによって小泉製麻に就職している。

赴任についてはどうか。アキ子氏が就職した1951年には鹿児島県から戦後初の集団赴任が実施されている（山口，2016）。しかしアキ子氏自身はおそらく、行政とは関係のない、より小規模なかたちで赴任している。同年に大分県から就職した者による「4月中に山陰・中国勢と九州勢が2回に分かれて赴任してきた」という先の文章とも合致せず、アキ子氏のような個別的な赴任も並行して実施されていたものと思われる。1960年に出郷したトキ子氏は、行政が手配した就職列車によって神戸市まで移動したようである。

両者ともに仕事は大変だったと話しており、「駒沢紡績語」のような標準語的な言葉の使用経験も共通する⁽¹⁹⁾。また、アキ子氏の話からは、近江絹糸人権闘争と同時期ではあっても、賃上げ闘争のような運動は組合の一部の人々が中心になって担われていたことも理解される。

寮生活や余暇活動をめぐる姉妹の語りはかなり異なる。アキ子氏は、小泉製麻での生活全般について肯定的に話す。それに対しトキ子氏は、就職後間もなく経理学校に行くために退職することを決意したためか、「遊んでいた記憶はあまりない」。トキ子氏が就職した1960年頃には進学率が上昇しており、他方では生産活動も強化され、求人難が強まっていた。1960年代の小泉製麻では、同氏のような進学希望者に向けて企業内学校を強化していく（山口，2019）。

アキ子氏と、先に挙げた大分県出身者は同じ1951年に就職している。ミシンを利用して自ら衣服を作ったり、給料が2500円程度であったという記憶は

共通するが、食事に関しては、アキ子氏は不満を感じたことはなかったと言いつ、大分県出身者は物足りなかったと記している。この時期の集団就職者について考える場合にも、こうした個々人の意識や経験の差異を軽視してはならないであろう。その点に留意しつつ、次章では社内報の記事を利用して仕事や寮生活、余暇活動の在り方や、それらに対する意識を見てみたい。主な時期は1960年代から70年代初頭となる。

Ⅳ 仕事・寮生活・余暇活動

(1) 仕事

まずは仕事についてである。小泉製麻では入社時に担当工程が決められていた。1973年の新入社員教育は次のようなものであった。「入社して一週間はみんないっしょに会社の内容を教えてください。それから各職場にわかれて、仕事のやり方を教わりますが、最初の一ヵ月ぐらいは指導員がついて少しずつ教えてくれます。一ヵ月過ぎると自分一人でできるようになります」⁽²⁰⁾。つまり工程全体を学んだ上でそれぞれの担当工程について詳細に教えられたのである。

では、各工程の仕事について当事者はどのように感じていたのだろうか。社内報『いずみ』には複数の従業員を集めて特定のテーマについて話し合うという「座談会」の記録がしばしば掲載され、話者の名前には出身地名も並記された。1965年の「現場系座談会」は次のようであった⁽²¹⁾。

長友〔宮崎県〕 仕事ができないときは、もう帰りたいと思ったけれど、もう今は大丈夫、とてもうれしいです（。）

中野〔高知県〕 私のところは、二紡糸の前紡、一番簡単のところですよ。

長友 いいわね。私のところは一番むずかしいのよ。一紡糸の精紡なの。歯をくいしばってがんばったわ。

末長〔大分県〕 私は撚糸ですが、はじめは麻の臭いがいやでした。

長友 音も気になったけれど、今はもうなれましたね。

梅谷〔兵庫県〕 私の仕事は整糸です。ほこりもなく静かですよ。〔中略〕

福田〔滋賀県〕 私は織布の仕上げだけど、布にキズが多い時には、ちょっと困りますが、教育係のかたがたがとても親切に教えてくれるので、仕事もしやすいしおもしろいです。

石橋〔島根県〕 私も織布ですが、はじめは教育係のかたが、怒っているみたいでとてもこわかったんです。

長友 織布の方は、音が高いから大きな声で言わないと聞こえないからでしょうね。教える時はこわいようだけれど、休憩時間はとてもやさしいわ。

大原〔宮崎県〕 私は精紡ですが、班長さんも助手さんも、とてもかわいがって教えてくれますので、つらいと思ったことは一度もありません。

……

石橋 「甲班に負けないように」と言われるのです。でも横糸がもつれると、全部ほどきなおしでしょう。糸がきれてつないでいると「一本に何時間かかるの」といわれて……とても悲しかった。〔後略〕

以上から様々なことが分かる。生産工程には難易差があり、さらには騒音や臭いがある工程もあれば、静かで清潔な工程もあった。教育係には優しい者も厳しい者もあり、優しい者であっても状況によっては厳しくなった。交替制勤務が採られており、甲乙両班は相互に「負けないように」と言われながら作業をしていた。仕事について辛いと感じた者もいれば、そうした思いを抱かなかった者もいた。仕事を辛いと感じた者は退職・転職を思い浮かべることもあったかもしれない。1967年の座談会記録のうち、そうした問題が話題になっている部分を見てみよう⁽²²⁾。

漣〔兵庫〕 私は勤めて一年半経った頃、いやになってしまって、毎日や

めたいと思っていたことがあります。このころが一番グラグラするよう
に思います。

吉村〔宮崎〕 だれだってもう辞めようかと思ったことはあると思います。

〔中略〕

徳留〔宮崎〕 この会社やめて、他に就職した人も後悔している人が多い
ですね。

漣 すぐお給料が高いか安いかで決める人が多いわ。聞いていたら「あそ
こはここよりもいくらお給料が高いからここ辞めてあそこに行くねん」な
んていっています。そういう人は後悔しています。わかってないんですね
（笑）

徳留 私は昨年小泉を退社して田舎に帰っていたんです。しばらくして人
にさそわれて、尼崎にある会社に入社したんですが、一ヵ月も勤めません
でしたね。その会社をやめて帰国する前、小泉に遊びに行って、たまたま
再入社の話が出たんです。私もできたらもう一度小泉で働いてもいいなと
思っていたし、また入ったわけです。〔中略〕外に出てみて小泉の良さが
わかるんですね。とくに寮の設備が整っていると思います。それに自由で
すね。小泉ほど女子寮生がのびのびしているところはあまりないんじゃない
ですか。

漣 そこがうちのいいところだと思います（笑） 規則でしるより各自
の自覚を信頼して、みなにまかせるということですよね。

柳井〔大分〕 でもこれだけ沢山の寮生が生活しているんだから、どうし
ても変な方向に誘惑される人もでるでしょ。だからもう少し規則をきびし
くした方がいいかもわかりませんね。……

漣 職場は仕事がえらいけど、回りの人達がいいから楽しいですね。

川部〔大分〕 同感です。私のところも人間関係がうまくいっているし、
上下の差別がほとんどないでしょ。気楽でいいですね。〔後略〕

1950 年代に働いたアキ子氏は「働くのが嫌になって退職したという人は身近

にはいなかった」と言う。しかし 1960 年代におけるこの座談会では退職を考えることは珍しくないとされ、周囲では実際に退職者もいた。1960 年代には状況が変わっていたのであろうか。退職を考える理由としては仕事の難しさや給料の多寡が挙げられている。給料に影響されて退職した者は軽率であると批判され、自由や自主性、良好な人間関係、気楽さといった理由によって小泉製麻での就労や生活が肯定されている。

以上のように、各生産工程では難易や環境がそれぞれ異なっており、同一工程の従事者であってもその工程に対する意識は必ずしも一致しなかった。退職を考えた者は珍しくなかったが、少なくとも座談会の参加者にとって小泉製麻での仕事や生活は肯定されるものであった。

田之頭姉妹と同様に、座談会における多声的な語りからも、当時の若年労働者の多様な在り方が理解される。もちろん、多様性という側面に力点を置き過ぎてしまうと、厳しい条件に置かれていた人々の在り方をも過度に相対化してしまうという問題が生じてしまうことであろう。複数の人々を対象とする場合にはそうした問題にも留意すべきである。しかし実際に、当時の若年労働者たちの経験や意識が多様だったこともまた確かだと思われる。

(2) 寮生活と人間関係

1950 年代に働いたアキ子氏は、そのいずれかの時点で勤務体制が三交替から二交替に変わったと記憶している。しかし、この時期の若年女性労働者が三交替で勤務していたことを示す資料は現時点では見出せていない⁽²³⁾。1959 年のある対談では、もっと以前、つまり戦前の 1925 年頃には二交替 12 時間勤務であったとされ、「今の人は、あーいう時代のつらさは、わかりません。夢のようですネ」と語られる⁽²⁴⁾。図 4 は 1925 年頃と 1962 年における交替制勤務を示している。後者のような甲乙 2 班の二交替制は少なくとも 1950 年代後半には間違いなく採用されており、4 階建ての女子寄宿舎の 1・2 階が甲班、3・4 階が乙班というように生活上の空間までもが区分されていた⁽²⁵⁾。この両班が 1 週間ごとに早番・後番を入れ替わりながら勤務していたのである。図 4

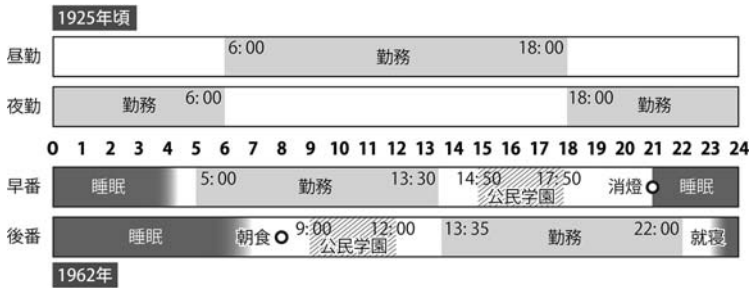


図4 小泉製麻における交替制勤務（1925年頃・1962年）

注：図の内容は資料で確認できる事項に限られる。1962年については公民学園の生徒の例を示す。

資料：『いずみ』第20号，1959年11月，同第48号，1962年3月，『いずみ家庭版』第5号，1962年10月。

の示す2つの時期の勤務体制は大きく異なるが、後者を「夢」のような生活とまで言えるかどうかは分からない。企業内学校である公民学園では毎日3時間の授業時間があつた。1962年の座談会での発言によれば、「早番は、ひる一時三十分には作業が終るので、時間的にゆっくりする。後番は午前中公民学園に行く去何にもすることができない。洗濯する時間も、うっかりするとなくなる」⁽²⁶⁾。公民学園に参加しなければその時間は自由になったはずだが、その時間はどのように使われたのであろうか。

次に、生活上の重要な要素であるはずの食事はどのようなであったか。同じ1951年に入社したアキ子氏と大分県出身者は異なる意見を述べていた。1958年には、同社の食堂では1日3食でおよそ7000食を作っていたという⁽²⁷⁾。1967年の座談会では食事について退職と結びつけながら言及されている。「食事の問題も大きいと思うけど。人数が多すぎるせいか、食事の内容がわるいですね。もっと食事内容が良くなれば、補食、間食の出費も少なくなるし、それでやめていく人もいなくなると思います」⁽²⁸⁾。つまり食事を原因とした退職者もいたというのである。もっとも、社内報を通覧しても、食事に関するこうした記述はこれら以外には特に見られない。

食事よりもはるかに多く語られているのは寮での人間関係である。田之頭姉

妹の話にもあったように、小泉製麻における交友関係の中心は寮部屋にあった。1962年の座談会では「部屋の中のみんが、仲よくしている時は、部屋は花が咲いたみたい。ところが一人でも気まづくなるとみんながいんきになる」,「一つ一つの部屋の空気が、うまくゆくことが、結局寄宿舎という社会が、明るくなってゆく事です」⁽²⁹⁾。寮部屋と、そこでの人間関係が何よりも重要だったのである。

では、寮部屋や所属する班が異なる者との関係はどのようなものであったか。これも年代によって異なる部分があると思われるが、1970年には次のように語られた⁽³⁰⁾。

——隣の部屋とは交流がありますか。

個人的にはあるんだけど、部屋全体の交流はちょっと少ないみたい。隣の部屋に一人でも友だちがいたら話はするけれど、そういう人がいないと、すぐ隣でも全然交流がないところもあります。

——甲、乙別に、交替勤務だったら、その人たちとは全然交流がないんですか。

ほとんどないといってもいいくらい。顔をあわせることはあるけれどね。私の場合短大に行ってるから、話もするけれども、[中略]寮の中で上と下に住んでいるけれど、話しかけることもないし、水くさくなるね。乙勤務の中でも全部の人を知らないのに、ましてや甲勤務の人まで知ろうとは思わないし。やっぱり近くの人を頼りにするようになってしまう。それでも、甲班の人ともっと交流したい。もっと違う考えの人がいるのじゃないかと思う。

このように寮部屋を超える人間関係は必ずしも強いものではなかった。特に甲乙両班の間では、企業内学校の授業時間も異なっていたため、職場や学校以外の場を通じてでなければ知己を得ることが難しかった。この引用文の話者は乙班に所属しており、「甲班の人ともっと交流したい」と話す。しかし別の話者

は甲乙間での交流について「別にしたいとは思わない」⁽³¹⁾と言っている。これは寮部屋などでの人間関係が充実していたことの現れかもしれない。

先の引用文では「上下の差別がほとんどない」という言葉が見られた。では、先輩との関係はどうであったか。次に挙げる文章はいずれも 1968 年のものであり、前者は職場の、後者は寮部屋での先輩について言及している⁽³²⁾。

紡績甲 松沢（宮崎） 職場の先輩で相談にのってくれる人ができたことです。職場でいやなことがあって、寮に帰ってきてしょんぼりしていた時、先輩がわけを聞いてなぐさめてくださったのがうれしくて、泣いてしまいました。

織布甲 勝間（滋賀） 私達の部屋は今 8 人で、学卒が 4 人と先輩が 4 人です。先輩とは話しがあわない時もあるので、先輩は 2 人位にしてあとは同じ年令の人にしたらよいと思う。

これもまた人や状況によって様々な意見があったことであろう。なお、年齢を異にする寮生間の関係については会社側も留意していたようであり、1960 年代後半には次の措置が採られている。まず 1968 年には年齢の高い寮生向けに「新在家中社宅」の一部が女子寮として利用されるようになり⁽³³⁾、翌 69 年以降には青葉寮（旧女子寄宿舎）において 18 歳以上の寮生を対象に居室のベッド化が進められた（山口，2019，p.57）。他方で 18 歳未満の寮生に対しては、集団生活を重視して従来の寮部屋がなおも用いられたのであった。

（3）余暇活動と諸行事

ここでは、勤務時間や企業内学校での学習時間、あるいは生活必要時間などを除いた相対的に自由な時間での諸活動を余暇活動とする。余暇活動には私的なものと、部活動など半ば公的なものがあった。次節で触れる旅行については公私ともに様々な機会に実施された。さらに、余暇活動とは言えないであろうが、より公式的な行事も様々にあった。代表的なものとしては運動会や小泉の

盆おどりがあり、さらには家族を呼び寄せて実施される出身県別の「小泉見学会」、あるいは同郷者によって構成される職員県人会の活動なども含まれよう(山口, 2019)。

私的な余暇活動について 1962 年の座談会での発言を見てみよう⁽³⁴⁾。「暖かくなりだすと、戸外スポーツで、ソフト、縄とび、バレーボールなどなるべく外に出て日光にあたるようにしている。／部屋では、本をよんで、何かたべる。そしてしゃべる。／テレビはよく見る人と、あまり見ない人とがある。／連続ドラマは、一週間おきになるのでやはり歌の方にかたよる。／映画は、だいたい入社一年間は月一回位。二〜三年となると二〜三回。みんながみんなそうではないでしょうが。／三ノ宮へ映画を見に行くと、四〜五〇〇円位つかります。もちろんかえりに、ちょっと何かたべますが。／外部の映画館へ行くのは、新入の人は夏頃からでしょう。／会社の映画を三回、外に一〜二回、週に一回見ることになります。／本を読む事と、時折映画を見る、そしておしゃべりする、という事が、私たちの楽しみといえましょう」。社内報の別の記事(1961 年)では小泉製麻の若年女性労働者が「三宮などの繁華街にあんまり出ていけない」⁽³⁵⁾という話もあるが、映画観賞のために三宮に出かける者もあったようである。基本的には読書、映画観賞、会話が中心であり、交替制勤務の影響でテレビの連続ドラマはあまり見られなかったという点も興味深い。

こうした日常的な活動で必要な 1 か月分の小遣いについても触れられている(1962 年)。「入社して夏ごろまでは、お菓子代三〇〇円位、日用品五〇〇円位、つめたいものが欲しくなってくると、おやつ代が四〇〇円、秋頃から五〇〇円と、だいたい季節ごとに一〇〇円位、考えてみると少しずつ、増えている。もちろんこの中に映画代も入っている」⁽³⁶⁾。

大規模な行事の代表例は運動会であろう。アキ子氏の話にも登場しており、社内報が発行され始めた 1958 年にも「はでだった運動会」という記事が掲載されている⁽³⁷⁾。運動会では「出身県別のリレー」もおこなわれた。「鹿児島、宮崎、大分、島根、鳥取、兵庫、四国と、それぞれ出身県の名前を胸につけていっしょうけんめいに走りました」⁽³⁸⁾。運動会はおそらく毎年のように実施さ

れていたと思われるが、1967年には「今年は3年ぶりに運動会が行なわれます」⁽³⁹⁾とあることから、開催されない年もあったようである。この件に関しては、先述した本社工場やその周辺での整理事業が影響していたのかもしれない。1972年には「秋の運動会は“グランド六甲で”ボウリング大会を計画」とあり、小泉製麻が開設したボウリング場での競技会が「運動会」として実施されている⁽⁴⁰⁾。1973年には「昭和四十五年以来、二年間中断されていた運動会」が開催された。屋外グラウンドを利用した一般的な形態での運動会に戻っている⁽⁴¹⁾。

その1973年については「今年の運動会はいずみ会が発足して初の秋の行事です」⁽⁴²⁾とある。この「いずみ会は会社、労働組合、健康保険組合、寄宿舎自治会の四者でつくられたレクリエーション団体で」⁽⁴³⁾あった。こうした全社的なレクリエーション関連の包括団体は「小泉製麻レクリエーションの会」(KR会)にまで遡ることができる。KR会が何年に発足したかは管見では不明だ

表1 小泉レクリエーションの会(KR会)の傘下団体

体育部			文化部		
創部年	名称	SR会	創部年	名称	SR会
1919	野球部	●	1927	音楽部	
1929	庭球(テニス)部(軟式)	●	1947	愛釣会	
1947	排球部(バレーボール)	●	1952	演劇部(やしの実会)	
1950	庭球(テニス)部(硬式)	●	1953	石友会(囲碁)	
1951	卓球部	●		棋友会(将棋)	●
	陸上競技部	●	1954	光画会(写真)	
1954	柔道部□			吟謡会(うたいの会)	
1955	剣道部	●	1955	扇柳会(日本舞踊)	
1960	バスケット部(バスケットボール)		1958	彩友会(絵画)	
1961	弓道部□		1959	むらさめ部(カルタ)	
1962	スケート部		1962	民謡研究部(SR会のみ)	●
以降	ソフトボール部	●		フォートクラブ(SR会のみ)	●

注：表中の□は1962年時点では活動していたが1967年には確認できないもの、●は滋賀工場のSR会に所属するものを示す。

資料：『いずみ家庭版』第4号、1962年1月。『いずみ』第109号、1967年4月。

が、同会を構成する体育部・文化部の傘下組織のうち、野球部、庭球部（軟式）、音楽部は戦前から活動していた（表1）。傘下組織の大半は1950年代に創部されており、同時期における従業員数の増加や福利厚生の拡充に対応した動きだと思われる。1962年には「従業員の多くがどれかに入部して活躍しています」⁽⁴⁴⁾との記述があるものの、どの程度の従業員が参加していたのかは分からない。新設の滋賀工場にはSR会が置かれ、1968年にはKR会・SR会が「小泉オールレクリエーション会」（ARS）へと改組され、さらにARSは1973年にいずみ会となっている⁽⁴⁵⁾。

小泉製麻の若年労働者たちは寮部屋の仲間とともに生活しつつ、レクリエーション組織や企業内学校、会社挙げての運動会に参加することもできた。特に後者のような大規模な行事や組織の充実は、大手企業ならではの福利厚生の一環だと言える。

（4）休日の長期化と帰省・旅行

アキ子氏は、小泉製麻に勤めていた時期には故郷の鹿児島県へ帰省したことがなかった。おそらくその理由の1つは長期休暇を取りにくかったことにあるだろう。たとえばお盆休みは1950年代には2日間しかなかった。これが1961年に3日、66年に4日、74年に5日へと少しずつ長期化していく⁽⁴⁶⁾。1974年のお盆休みには「昨年にくらべて休日増とあって……帰省する寮生が目立ち、本社工場で49%、滋賀工場で35%の寮生が帰省した」⁽⁴⁷⁾。さらに同じ記事によれば「旅行や親せきの家に遊びに出た人も多く、……寮に残留した人は本社では20%足らず、……滋賀では38%」とされた。つまり休日が長期化すれば帰省や旅行に出かける者も増加するのである。同社では1960年代半ばから帰省者向けに大型バスや船便の手配をおこなうようになった（山口、2019, p.61）。

1961年にお盆休みが3日間に延長されることが前年に決定されると、それに合わせて「旅行会」という組織が発足している。「この休みを利用して、見聞を広めようと、旅行会が発足、皆さんのご希望により、3コースがきま

り」⁽⁴⁸⁾，旅行資金の積立も始められた⁽⁴⁹⁾。61年のお盆休みの前日，つまり8月13日の17時には，志賀高原，富士五湖，東京という目的地別の3班が5台の観光バスに分乗して出発している⁽⁵⁰⁾。旅行会の活動はその後も続けられていく⁽⁵¹⁾。

アキ子氏によれば1950年代には社員旅行が実施されていた。高度経済成長期は社員旅行のような団体旅行だけでなく，若年女性による個人旅行が一般化した時期でもあった（森，2010）。小泉製麻では1969年に「旅行相談所」を毎月1回開設し，国鉄旅行コンサルタントによる相談業務をおこなうようになった⁽⁵²⁾。「皆さん旅行はとてもたのしいものです。旅行のよい思い出をより深く残すためにはすばらしいプランが必要です。この度旅行相談所を設け皆様方のお役に立ちたいと思いますのでどうぞお気軽にご利用下さい」。

このように高度経済成長期を通じて休日が長期化し，それに合わせて旅行が活発化した。もっとも，盆や正月の休暇中に旅行や帰省に出かけない者もいた。そうした者のために映画鑑賞会や宝塚観劇会，餅つき大会などが催されたが，特に終戦直後に開始された小泉の盆おどりは社外にも知られた大規模なものであった（山口，2019，p.62）。それは，従業員の様々な出身地における踊りの演目を参加者全員で踊るという，出郷してきた若年女性労働者のための祭典だったのである。アキ子氏がそうだったように盆おどりを毎年楽しみにしていた従業員は多く，「盆おどりのためわざわざ休暇を切り上げて帰ってくる寮生も」⁽⁵³⁾いたという。小泉製麻にはこうした機会が様々な用意されていたのである。

V おわりに

前稿と本稿では小泉製麻を対象に，大手企業と集団就職との関係を多面的に見てきた。特に本稿では聞き取り調査結果や社内報に基づいて，生産工程や寮生活，それらへの意識，余暇活動や諸行事について確認した。同社の若年女性労働者たちは寮部屋の仲間とともに工場内外で映画や飲食を楽しみ，企業内学

校、レクリエーション組織、職域県人会、運動会や盆おどりなどに参加し、旅行に出かけながら生活していたのである。

同社における生産工程は多岐に渡り、各工程の難易や労働環境はそれぞれ異なっていた。同じ工程に従事していた者の間でも仕事への意識が異なる例があった。生活の中心となったのは寮部屋であり、寮生間の関係であった。他方で寮部屋を超える人間関係は必ずしも広がらず、特に交替制勤務によって生活上の時空間を異にしていた甲乙両班の人々が交友関係を築くことは難しかった。トキ子氏の事例では、同じ学校の出身者とは異なる生産工程に配属されたため、それらの人々との関係が維持されることはなかった。もちろん職場や様々な活動を通じてネットワークを広げることも可能だったはずである。運動会や小泉の盆おどりといった大規模なイベントもあった。高度経済成長期を通じて休暇が延長されていくと、それに合わせて1961年には旅行会が組織され、1969年には旅行相談所が開設された。仕事の難しさや賃金の多寡によって他社への転職を考えた者もいたものの、一定の年齢まで小泉製麻で働きつづけたアキ子氏のような人々は、同社での生活を肯定的に捉え、退職後も良い思い出として記憶していることであろう。

冒頭にも記したように、集団就職という現象はネガティブなイメージで語られることが多い。しかし小泉製麻の多くの若年女性労働者たちはそうした語りとはおそらく異なる状況で働き、生活していた。仕事や食事、人間関係については肯定的とは言えない意見もあったものの、全国的に知られていた企業内学校の整備も含め、総じて良好な印象を与えるものであろう。集団就職の限定されたイメージを見直すには、複数の事例、多様な経験に留意し、それらの間にある差異や賛否の声をともに見ていくような姿勢が必要となる。小泉製麻はその意味で興味深い事例を示してくれているように思われる。

【付記】 本稿の作成に当たり小泉製麻株式会社の豊田句子氏、また大園アキ子氏、船都トキ子氏、仲野兼夫氏とご家族・ご親族の皆さまには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。なお、前稿の付記では大園氏の姓を田畑氏と誤記しておりました。この場を借りて謹んで訂正させていただきます。

註

- (1) 労働争議に関しては、あいち「青春の日々」刊行委員会編（1999）なども参照。
- (2) 集団就職者の余暇活動については様々な文献において言及されてきた。しかし岐阜県羽島市における集団就職者と映画館の増加との関係を記した大西（2007）のような研究は必ずしも多くない。
- (3) 「ジュートが工場へ到着する日には赤飯を炊き、ジュート祭を催して大集会所に当時売り出しの服部富子嬢や西条凡児氏を招き、久し振りに演芸大会を開いて一陽来復を祝った」（『いずみ』第 57 号，1962 年 12 月）。
- (4) 『いずみ』第 69 号，1963 年 12 月。
- (5) 『いずみ』第 24 号，1960 年 3 月。
- (6) 『いずみ』第 273 号，1985 年 3 月。
- (7) 大分合同新聞，1952 年 2 月 14 日。山口（2018）も参照。なお，翌 53 年には大分「県職安課でも……お得意先の神戸小泉製麻（工員二千人のうち八百人は本県人）……などにたのみ込む」（大分合同新聞，1953 年 1 月 11 日）というように，この時期の集団就職の特徴である労働力供給県からの求人開拓の動きが確認できる。
- (8) 同図は，前稿（山口，2019）の図 4 において 1959 年のデータに誤りがあったため，それを修正したものである。
- (9) 以下の説明では『いずみ』第 16 号，1959 年 7 月から同第 22 号，1960 年 1 月にかけての連載記事「職場とその製品」も参照した。なお，時期によって各工程の名称が変更されることもあったようである。
- (10) 『いずみ家庭版』第 4 号，1962 年 7 月。
- (11) 『小泉製麻株式会社社報』創刊号。1958 年 4 月。その他の部門別人数は配給 7 人，施設 5 人，注油 4 人，総糸 4 人，糊糸 4 人，仕上 4 人，撚糸 3 人，立経 2 人であった。
- (12) 『小泉製麻株式会社社報』第 4 号。1958 年 7 月。
- (13) 『いずみ』第 42 号，1961 年 9 月。
- (14) 『いずみ』第 114 号，1967 年 9 月。
- (15) 『いずみ』第 126 号，1968 年 9 月，同第 137 号，1969 年 8 月。
- (16) 『いずみ』第 139 号，1969 年 10 月。1969 年 1 月 3 日には住友ゴム従業員とともに「新春ゲーム大会」を開催した（『いずみ』第 129 号，1968 年 12 月）。周辺工場との関係を示す記載は多くはないが，こうした例も確認できる。
- (17) 田之頭姉妹に対する聞き取り調査は家族の仲野氏，小泉製麻の豊田氏の助力を得て実施した。アキ子氏からは 2019 年 8 月に千葉市の自宅において，さらにアキ子氏・トキ子氏姉妹からは同年 11 月に尼崎市で開催された鹿児島県江石会運動会において話を聞く機会を得られた。

- (18) 『いずみ』第26号, 1960年5月。
- (19) 『いずみ家庭版』第1号, 1961年10月には, 同社では「いわゆる小泉語」と呼ばれる「標準語?」が使われていたと記されている(山口, 2019, p.58も参照)。しかし田之頭姉妹のいずれも「小泉語」という呼称は聞いたことがないという。
- (20) 『いずみ』第179号, 1973年2月。同じ記事では, 仕事における身体的な疲労感についても触れられている。「自然に慣れますが, 仕事をはじめて十日目ぐらいが一番しんどかったわ。でも一ヵ月もたてば何ともなくなりました」。
- (21) 『いずみ』第86号, 1965年5月。
- (22) 『いずみ』第114号, 1967年9月。
- (23) 『小泉製麻株式会社社報』創刊号(1958年4月)によれば, 電気班については甲乙丙の三交替制勤務であったという。また1959年8月の記録(内部資料)には「労働組合は要求統一闘争の為各番2時間のストライキを行う。前番・後番・昼番」との記載があるという。よって小泉製麻には三交替制の職場もあったようだが, 同時期の若年女性労働者については甲乙二班の二交替制であった。
- (24) 『いずみ』第20号, 1959年11月。
- (25) 『いずみ』第60号, 1963年3月。
- (26) 『いずみ』第48号, 1962年3月。
- (27) 『小泉製麻株式会社社報』第3号, 1958年6月。
- (28) 『いずみ』第114号, 1967年9月。
- (29) 『いずみ』第48号, 1962年3月。
- (30) 『いずみ』第146号, 1970年5月。
- (31) 『いずみ』第146号, 1970年5月。
- (32) 『いずみ』第124号, 1968年7月。氏名については姓のみ残した。
- (33) 『いずみ』第124号, 1968年7月。
- (34) 『いずみ』第48号, 1962年3月。
- (35) 『いずみ』第42号, 1961年9月。
- (36) 『いずみ』第48号, 1962年3月。
- (37) 『小泉製麻株式会社社報』第9号, 1958年12月。
- (38) 『いずみ家庭版』第2号, 1962年1月。
- (39) 『いずみ』第114号, 1967年9月。
- (40) 『いずみ』第174号, 1972年9月。
- (41) 『いずみ』第186号, 1973年9月。
- (42) 『いずみ』第188号, 1973年11月。
- (43) 『いずみ』第188号, 1973年11月。
- (44) 『いずみ家庭版』第4号, 1962年7月。
- (45) 『いずみ』第124号, 1968年7月, 同第184号, 1973年7月。

- (46) 『いずみ』第 39 号, 1961 年 6 月, 同第 101 号, 1966 年 8 月, 同第 198 号, 1974 年 9 月。
- (47) 『いずみ』第 198 号, 1974 年 9 月。
- (48) 『いずみ』第 39 号, 1961 年 6 月。
- (49) 『いずみ家庭版』第 1 号, 1961 年 10 月。
- (50) 『いずみ』第 42 号, 1961 年 9 月。
- (51) 管見では, 少なくとも 1972 年までは旅行会に関する言及を見出せる。『いずみ』第 177 号, 1972 年 12 月。
- (52) 『いずみ』第 134 号, 1969 年 5 月。1973 年の社内報では「三の宮旅行センターの方」による相談とある(同第 179 号, 1973 年 2 月)。
- (53) 『いずみ』第 174 号, 1972 年 9 月。

参考文献

- あいち「青春の日々」刊行委員会編(1999)『「女工哀史」をぬりかえた織姫たち』光陽出版社。
- 新 雅史(2015)「河西昌枝－引退できなかった『東洋の魔女』－」, 荻谷剛彦編『ひとびとの精神史(第 4 巻)－東京オリンピック 1960 年代－』岩波書店, 72-94 頁。
- 上野又勇編著(2012)『阪神電車－街と駅の 1 世紀－』彩流社。
- 大西宏治(2007)「岐阜県羽島市の景観変容と地域変化－女工と活気と映画館－」, 阿部和俊編『都市の景観地理 日本編 2』古今書院, 152-156 頁。
- 「小泉製麻百年のあゆみ」編集委員会編(1990)『小泉製麻 百年のあゆみ』小泉製麻株式会社。
- 田辺真人監修, 灘区 80 年史編集委員会編(2011)『灘の歴史』神戸新聞総合出版センター。
- 成田龍一(2016)『「戦後」はいかに語られるか』河出書房新社。
- 本田一成(2019)『写真記録・三島由紀夫が書かなかった近江絹糸人権争議－絹とクミアイ－』新評論。
- 三島由紀夫(1987)『絹と明察』新潮社(新潮文庫)。
- 森 正人(2010)『昭和旅行誌－雑誌『旅』を読む－』中央公論新社。
- 山口 覚(2016)『集団就職とは何であったか－〈金の卵〉の時空間－』ミネルヴァ書房。
- 山口 覚(2018)「就職列車と就職船－戦後大分県の集団就職に見る集団赴任の展開－」関西学院史学 45, 1-31 頁。
- 山口 覚(2019)「大手企業と集団就職－小泉製麻における若年女性労働者の赴任と生活－」人文論究 69-1, 41-69 頁。